左：天使の羽茶碗　高8.0　径13.5cm　2016年
右：波紋水指　高15.0　径19.0cm　2016年
撮影／野村知也（p.86-88）

フォーカス・アイ

アーグネス・フス

Agnes HUSZ

帯状の長い土がらせんを描きながら碗型となったり、
あるいは、折り曲がって皿状になっている独自の造形。
ハンガリー出身のアーグネス・フスの作り出す
ユニークなかたちは、他に類を見ない。
近年は、その帯の渦を活かして日本独自の
茶陶も制作し、高く評価されている。
元々は彫刻家を目指していた作家が、日本で
オブジェから茶陶まで、自由闊達に展開する軌跡を追う。

アーグネス・フス
1961年ハンガリー・モハーチ市生まれ。90年ハンガリー国立美術工芸大学陶芸科修士課程修了。93年長野県に窯を築く。オランダ・ヨーロッパ陶芸ワークセンター（EKWC）滞在制作。2006年第20回ハンガリー陶芸ビエンナーレ第3席賞。07年めし碗グランプリ大賞。09年第20回日本陶芸展賞候補。11年神戸ビエンナーレ現代陶芸コンペティション奨励賞。13年国際陶芸アカデミー会員。14年現代茶陶展TOKI織部優秀賞（16年奨励賞）。

13058_p086-089_focus_husz.indd　86　2016/12/22　13:09:41

波紋オブジェ
高16.0　径55.0cm　2016年

13058_p086-089_focus_husz.indd　87　　2016/12/22　13:09:45

帯状大皿
高7.5　幅55.0　奥行27.0cm　2016年

パズルオブジェ（6個一組）
パーツ小：高20.0　幅10.0　奥行10.0cm
2016年

13058_p086-089_focus_husz.indd　88　　2016/12/22　13:09:49

アーグネス・フスの帯から生まれる形

外舘和子

薄い帯状の土が、空気を孕みながら、たおやかに重なり、あるいは中心から渦を巻くように拡がり、時にはキューブのような形状へと展開する。アーグネス・フスの陶の形は、常に動きつづけている。それはあたかも、帯それ自体が意思を持って何かの形を追い求めているごとくである。いわば帯による自律的な造形といってもよい。

陶芸制作に板状の土、タタラを用いることは、かねてより多くの作家によってなされてきた。しかし、これほど繊細な帯の状態で自由に形を探るアプローチは類を見ないといってよいだろう。多くの陶芸家は、タタラを文字通り、必要なサイズにカットした「板」としてそのまま扱うか、湾曲させてそのままのサイズでカップなどの側面に使うことが普通である。あるいは例えば栗木達介の仕事に《組帯壺》という、土の帯に注目したシリーズはあるが、栗木のスタティックで隙のない形は、アーグネス・フスの柔軟で自由闊達な帯の扱いとはむしろ対極である。

この作家のユニークな造形は、実に独特な方法を経て生まれる。まず、模様が形に先行する。通常、陶芸家は形態を決めてから、その形に即して色や模様を入れていくものだ。成形のあとに加飾、というのが、一般的な陶芸制作の定石である。しかしアーグネスの場合は、形より先に模様を描いてしまう。版画用のプレス機から出てきた長方形のグレーのタタラの全面に、ブラシなどで、感覚的、即興的に模様を入れておく。近年よく使用するのは、例えば黒呉須や白化粧土など、比較的クールな渋い色調。素早いタッチのフリーハンド模様は、後々、帯の動きに沿って、さらに様々な表情を獲得していく。

模様の描かれたタタラを必要な幅にカットし、作家はこれを両手で振りながら徐々に伸ばしていく。伸ばす過程で表面にひびが入り、模様に柔らかさが生まれ、帯は当初のタタラより次第に薄くなり、長く伸びていく。土の持つ自然が、帯自体を作る中で巧みに取り込まれていくのである。この帯を巻いたり、重ねたり、あるいは包み込むようにして形を創り出していく。帯の縁や表面の細かな凹凸は、いかにも土の自然な表情を引き出し、それが黒呉須や白化粧の模様との一体感を無理なく引き出していく。

作家は、この土の帯を巻くという手法を1993年、オランダのEKWCの招待作家として3カ月滞在した際、本格的に手掛け始めた。当初は、タタラを用いて数字などをモチーフに、どちらかというとコンセプト優位の表現に取り組んでいたが、ふと出身地ハンガリーのケチケメイトの国際陶芸スタジオで、土の帯を丸めた「カタツムリのようなかたち」を作っていたことを思いだし、土の帯を中心から外へ巻き続ける行為を、日々繰り返してみた。次第に大きくなる渦巻は、直径1メートルにまでなった。巻くという行為の繰り返しそのものが、楽しくてならなかったという。帯の渦はやがてらせん状に展開するほか、形を求めて様々に動き出していく。90年代から茶陶にも関心を持ち、織部や志野も試したが、2014年、帯の渦が《波紋水指》（86頁）のような茶道具の姿にも至った。23年間、帯と向き合ってきた成果でもある。

学生時代、既にロクロも鋳込みも技術としては獲得しているが、帯の造形はより動きのある形を生みやすい。帯の重なり、帯の曲線や曲面、軽やかさや繊細さ、時にダイナミックな姿を自然と生み出すことができる。それは近年、器にもオブジェにも、また陶器でも磁器でも、自在に展開するようになった。自身で築いた灯油窯で1260度還元焼成。作品は最終的にやきものならではの雰囲気も獲得する。

アーグネスが生まれたハンガリーのモハーチはブラック・ポタリーの産地である。家には父親が買ってきた黒陶の手付きの壺などがあった。子供の頃から彫刻家になりたかった作家は、高校から陶芸コースで造形を学び、高校卒業後の4年間、製陶所で量産陶磁器のプロトタイプを作るアルバイトをしてハンガリー国立美術工芸大学陶芸科に進学している。アーグネスが大学受験の頃、80年代の共産主義国ハンガリーでは、彫刻の方が政治的な空気に影響されやすく、陶芸の方が自由な空気があった。

版画家・若林文夫と結婚した作家は、1993年から長野県で制作しているが、日本で制作できることを心から喜んでいるという。「やきものが必要とされている」ということを、日本では実感できるからである。造形の自由を探求するアーグネス・フスにとって、土の帯と日本で制作することは大きなアドバンテージなのである。

（TODATE Kazuko　工芸評論家・多摩美術大学兼任講師）

13058_p086-089_focus_husz.indd　89　2016/12/22　13:09:50